

大人の学びなおし第6クール 第4回「文学」レポート

文学で考える ケアの危機とジェンダー

名古屋大学 教授 飯田 祐子 氏



冒頭に先生から「本日の要点」2点が示されました。

①ジェンダーとは ②ジェンダー化した社会のひずみ…ケアの危機
まず、「ジェンダー」とは何か、というおさらいから入りました。

極めて文化的な枠組みで、社会的な性差を説明するのに使われるとのこと、欧米では1970年代から、日本では1990年代に認知されたとのこと。ジョーンスコットとジュディス・バトラーの書籍からジェンダーとは、について紹介がありました。文化的メタファーとして使われている、社会的に構築されたものであり、再生産され変わり得るものであるとのことでした。例として、トランスジェンダーのお話がありました。2つのどちらかに押し込めることで自分らしさを得られないケースについて、少数がインクルーシブされる世界に進んでいるとのこと。一方、性を本質的に捉えて少数者を排他的に考えるケースもあるとのこと、大問題になっているというお話もありました。

次に、ジェンダー化した社会のひずみとして、二元的な枠組みに当てはめることで、いろんなひずみが生まれ、それがケアの危機につながっているというお話がありました。ジェンダー化とは、男/女に割り振ることを言うようですが、例えば、「自立した」＝「男性領域」＝「良し」とされ、「社会的再生産（生殖・ケア労働等）」＝「女性領域」＝「漠然と否認」という構図によって、ケアだけでなく人と人とのつながりをもった生活基盤にまで危機を引き起こすとのことでした。ケアの危機を語る書籍として、ヤングケアラー小説やディストピア小説の紹介がありました。

これからは、ジェンダーは二元的ではなく二峰的で考えるべきとの先生からの提言を、皆さんはどう感じたでしょうか。

飯田先生、ありがとうございました

受講者の声

社会構造とジェンダーに関する種別とそこから考えられる危機というのが非常に興味深かった、考えたことがなかった視点でした。

今回は問題提起いただいた講義でした。ジェンダーについて今一度考えたいと思います。

ジェンダーやフェミニズムに関するイベントがあれば参加したいと思いました。

これまでにあまり関心を持っていない内容だったが、ジェンダーがケアにも繋がることを理解しました。

正直あまり考えたことがなかった分野でしたが、大いに考えさせられました。

これまであまり意識しなかったテーマであったが、考えるきっかけとなりました。

時代と共にジェンダーの捉え方も変わっている事や、文学との関係性などを初めて知り学びになりました。

二峰性を前提とした時、「多様性を認めて自分の行動を変えていく」事を完璧に行う事は難しい局面もあるだろうな、と感じました。

ジェンダーとケア、非常に興味深い内容でした。子供に依存したくないその思いも少し変わりつつあります。

生まれる・生きるについて、いろいろ考えたりしてしまうので、少し色んな本を読んでみようと思います。

これまでに読んだ本もそのような読み方ができるのでは？と思いました。（社会のジェンダー化を問う、という意味で、なのでしょうか？）

ジェンダーを考えるスタートラインに立つことが出来ました。